

輝かしく壮絶な到達点

本書に収められた四つの短編はいずれも作家自身と重なるらしい「私」によって語られ、知人の訃報や山梨の大雪、自身の骨折、猫の病気、カルチャーセンターの勤務経験など、保坂周辺の事実が盛り込まれる。読者は「私」のそんな記述を実話として、また、その考えを意見表明として読みたくなるかもしれない。

しかし、この文章には「小説的」と呼ぶしかない。単なる回顧談や思弁とは決定的に異なる。独特の佇まいがある。

そもそも小説の言葉とは何だろう。保坂和志は自らの作品をいわば実験台にしてこの問いと向き合い、かつ読み物としても成立させてきた数少ない作家の一人である。60歳となった彼が久しぶりにまとめたこの短編集には輝かしくも壮絶な、そして驚嘆すべき到達点が表示されている。

読者は戸惑いを覚えるものだろう。話がどんどん脱線する。語り手が先走り、変なところで笑いがある。かと思つと、突然、妙な熱気で告白が始まる。

何より気になるのは頻繁に使われる「私は……」という表現。通常の日本語の作法から逸脱し気持ちが悪い。誤植じゃないかと思つ。しかし、ど

保坂 和志 著

地鳴き、小鳥みたいな

うやらこの「私は……」の繰り返しが大事なのだ。通常、語り手は視線を束ねて文章の軸を固定する。この作品ではその統御がゆるい。だから視点が定まらない。「私は……」のたびに新しい語り手が登場するかのようだ。

保坂は最新エッセー集「試行錯誤に漂う」で、小説的体験を「書かれたつある時間の中に身を任せること」と説明するが、まさにそんな絶えざる更新の感覚がここに実現されている。語り手は「私」という枠から自由になっているのだ。

三つ目の短編「キース・リチャーズはすごい」を読むとわかるように、そんな作家の試みの背後には自己陶醉やノスタルジアとの熾烈な闘争があった。語るとは？ 自己愛とは？ といった問いをどきどきとする痛烈さと、思いがけない楽しさで差し出してくれる一冊である。

(東京大准教授・阿部 公彦)
講談社・1620円

